

ベルクソン哲学における言語の消極性と積極性

三宅 岳史

序

ベルクソンの言語に関する著述は断片的な形でしか残っていないが、それらはほぼ全ての著作に散らばっており、しかもそれらのうちには言語に対する様々な評価が入り混じっている。なかでもベルクソンは言語を自らの哲学的方法に対する障害として多岐にわたる非難を強調する。これを言語に関する明確な方法の欠如と直観への全的な帰一と解するならば、メルロー＝ポンティが『知覚の現象学』で批判したように、「直接的なものは孤独で、目が見えず、物言えぬ生(*une vie solitaire, aveugle et muette*)である」⁽¹⁾と言えるだろう。しかしまた、ベルクソン哲学が言語に肯定的な面をもっていることも事実である⁽²⁾。ただし言語批判の強い調子に比べると、肯定面は暗示的でまとまりがなく、さらにその全体像は把握しづらいように思われる。

ベルクソン哲学が言語から構成されている以上、言語の全的批判は、自らの全的批判につながるのと同じく、言語の消極性と積極性を曖昧にしておくことは、自らの哲学に曖昧さを帰すことになる。そしてこのことは直観の曖昧さが批判されることと無関係ではない。本論の目的は、ベルクソン哲学において現れる言語の多様な評価を、消極的（否定的）側面と肯定的側面に分けてそれぞれ明確にし、この二側面の関係について考察することである。その結果、それらの断片的著述の中にある種の一貫性が見出されるように思われる。

第一章ではベルクソンがそもそも言語をどのようなものと見なしていたかを分析する。第二章ではベルクソン哲学において言語が障害となる面を規定し、言語批判が全ての言語へ無制限に広がるものではないことを示す。第三章では前章で出された言語に対するネガティブな評価に対して、ポジティブな評価がどのように構成されるか、そしてそれらがどのような関係をもつのかを考察する。

第一章 ベルクソンの言語観

1 自然から文化へ

『試論』⁽³⁾の発表時期を前後して、『講義』第一集と第二集にはそれぞれ言語や記号について行われた講義が収められている⁽⁴⁾。両講義の間には主題や例の一致が見られ、記

号は自然の記号(signes naturels)と人為的記号(signes artificiels)の二つのカテゴリーに分けられ、いかにして前者から後者への移行が起こったかが共通の問題にされている。

まず自然の記号の例として、時期の早い『講義』第一集の心理学講義では、稲妻が雷雨の記号であり、紅潮が内気の記号であるということが挙げられ、それぞれに結果と原因がわりあてられ、その物理的あるいは生理的な関係の本質的な結びつきが強調されている。しかし時期が後である『講義』第二集のアンリ四世校の講義においては、それらに結果と原因の関係を見るところは共通しているが、まず第一にその記号的連関における原因が精神的あるいは心理的であることが強調される点が異なっている。例えば「紅潮の真の原因は血管の膨張である」(C, , 377)のに、我々は記号的連関においては内気を紅潮の原因としているのである。それに加え第二に、自然の記号におけるこの記号の原因は、精神的なものの中でもとりわけ情動(émotion)に限定され、自然の記号は情動の言語と言い換えられる。そして憤慨から拳を握り締めることや、恐怖から逃亡が出てくるように、「情動記号とは、情動が包含する(impliquer)自然な運動」(C, , 383)と規定され、この種の記号は情動と外的態度をもつ犬などの動物にさえ帰されるものとなる⁽⁵⁾。

このような自然の記号に対して、人為的記号の結果と原因の結びつきは習慣によるものであり、この記号は知性の反省や抽象による一般観念へと発展する人間に固有なものである。したがって、前者から後者の記号への移行は、動物から人間への、自然から文化への移行を意味する。この移行についての説明も情動の導入によって両講義の間に差異が見出されるように思われる。時期の早い講義では「記号は今日ではもう慣習としての価値しかないのだが、最初は状況によって要請され、必然化された動きだったのである」(C, , 216)と移行の原因は不明のままであるが、後の講義では「運動がその一部をなす情動から運動を分離し、切り離し、意図的に運動を産出できる」(C, , 384)ことが情動なしに観念を生み出すことにつながるものであり、それが移行の条件であると明確に規定されることになる。以上、ベルクソンの言語観の特徴の一つとして重要なのは自然から文化への移行と言語の関係について、比較的初期からベルクソンは関心を示していたこと、そしてそこにはまた情動が重要な役割を担っていることを示した。

2 言語と運動

『講義』第一集で言語に関して二講義続けて行われたうちの後半の講義では、言語(langage)と思考(pensée)の関係について論じている。この両者の関係もまたベルクソンの言語観の特徴をなすものであり、この場合の言語(狭義)は特に言語(広義——特に注記しない時はこの意味)の物質的側面を、そして思考は言語(広義)の精神的側面を示してい

る。両者の関係は『物質と記憶』の失語症分析を経て、『精神エネルギー』の諸論文で、より明らかなものとなっているが、その際運動という視点から言語の物質面と精神面をそれぞれ分析することによって、それらの理解をさらに深めることにしたい。

言語の物質面とはいかなるものであろうか。まず第一に考えられるのは、文字を構成するインクや、発音の音の振動などである。しかしながら紅潮の例で見たように、単に血管の膨張という物理的現象だけでは、記号にならない。「私は二人の人が知らない言葉で話しているのを聞く。それだけで二人の言っていることが分かるだろうか」(MM 120)。それらの物理現象は我々が文字を読んだり、発音を聞いたりする時、外的な運動として感覚器官にやってくるが、失語症の分析からベルクソンは、これらが言語として理解されるためには、それに随伴した内的な反復運動が必要であると考え。そしてベルクソン哲学において言語の物質面を構成するのは外的な運動よりむしろこの内的な運動である。

ではこの反復運動はどのような性質をもつのか。「反復は身体に分割させ、分類させ、本質的なものを強調する。反復は内的構造を特徴づける線を全体の運動の中で一つ一つ再発見する」(MM 122)。つまり反復運動は分節運動となり、そして反復は身体に習慣化されることで自動機構として、類似性を抽出し、弁別機能さえもつ。『物質と記憶』の結論では身体は記憶なき精神と規定され、その内的な反復運動こそ生まれかけの知性として言語の物質面を構成するものにほかならず、それが純粋な物理現象に還元されない理由でもある。

それ自身は意識や反省を介さないこの自動運動は、分節を明瞭にし、運動を方向付けるだけではなく、それによって逆に意識を呼び寄せるといふ働きを最も重要な役割としてもつ。この意識の排除と呼び寄せという働きは相反しているように見えるが、『精神エネルギー』では意識を介さない分節運動がしっかりとて初めて⁽⁶⁾、意識の呼び寄せが可能になることを示している。このように言語の物質面は言語の精神面とは無関係ではなく、それを呼び寄せるものとして働くのである。

それでは言語の物質面が内的な反復運動であるならば、その精神面はどのようなものか。この精神面は言語(狭義)に対して思考と呼ばれていたものであるが、通常思い浮かべられるのと異なって、それは観念や表象に等しいものではない。「思考は不可分な運動(un mouvement indivisible)であり、それぞれの語に対応する諸観念(les idées)は、思考の動きが止まるとすれば、思考の運動の各瞬間に精神の中にただ単に現れるような表象」(ES 45)である。言語の物質面が単なる物理現象ではないように、言語の精神面も単に観念や表象ではなく、それらを含みながらもそれらとは異質のものである。しかしこれは言語の物質面をなす内的な随伴運動とも異なる。「思考そのものには状態よりも方向が見出され、思考は本質的に連続的な変化であり、内的な方向を含む」(ibid)のであるから、それは反復によって

連続を分割する動きではないことは明らかである。

では思考はどのような運動として見出されるのだろうか。ベルクソンによると我々は文を聞く時に、個別の語に注意するだけでは足りず、「重要なのは全体の意味(*le sens du tout*)」(EC 148)である。この意味と呼ばれるものこそ我々が仮定的に再構築し、自らの精神を一般的な方向に置いた後、様々に屈折していく運動に他ならない。そしてこの運動は、過去から未来への我々の精神の前進なのである。ベルクソン哲学において言語の精神面を構成するのは、この意味という運動である。

では言語の物質的な面による精神面の呼び寄せに対して、意味はどう働くのか。例えば文章の読解を考える時、意味とは単語が占める相互の位置から全体的関係についての仮定であり、また「そこから現実知覚された単語の断片への下降」(ES 172)として意味は語と接合するのである。この全体的関係と運動という性格をあわせて、ベルクソンはこの言語の精神面である意味を「動的図式(*schéma dynamique*)」(EC 162)と名づける。そして意味を捉えるためには絶えずこの図式にイメージを上手く配置せねばならず、それは全的な捉えなおしを必要とするため、意識の平面から平面へと移行せねばならない。それゆえ思考とは形(*forme*)であると同時に力からも構成される。この全的な捉え直しは創造に等しく、それゆえベルクソンは読解と著述を同じ意味の創造的運動によって説明するのである。

言語の物質面が「同一平面内での水平的な」(ES 166)運動であるのに対し、言語の精神面は「我々を一方の平面から他方の平面に移動させる垂直的な」(*ibid*)運動である。前者は持続や生命の動きに類する過去から未来への連続的な運動であり、後者は反復によって前者の連続性を分割するが、それによって前者と結びつきながらそこに含まれていたものを明確にし、方向づけ、活気づけさえするであろう。さて以上が運動という視点による言語の物質面と精神面の分析であり、ベルクソンの言語観の特徴をなすものである。この章ではベルクソンの言語観として自然から文化への移行と言語の物質・精神両面を考察した。

第二章 言語批判の二つの側面とその原因

なぜ、そしてどのような点で言語は非難されるのか。ベルクソンの言語の消極的 - 否定的評価を分析するためには、次の点を確認しておく必要があるように思われる。すなわちベルクソン哲学における言語に対する非難は認識論的なものと存在論的なものがあり、この二つをよく区別する必要があるということである。では認識論と存在論の中でそれぞれどのようなものが非難の原因となっているのかを考察する。

認識論において言語が非難される原因は二つのものが考えられる。一つは言語が空間的性質すなわち停止への本質的な傾向をもつこと、そしてもう一つは言語が社会的・実利的

な起源と機能をもつことである。しかし重要なことは、これらが錯覚の原因となるのは哲学的認識に対して錯覚を引き起こす限りである、ということである。まず言語の静的で空間的な性質が哲学的認識の錯覚の要因となるのは、運動や持続などの動的・時間的性質をもつ実在を、空間的な言語によってのみ再構成しようとする場合に限られる。その場合、空間的な言語による時間的性質の再構成は、両者の混同を引き起こし、その結果、時間的性質を取り逃すことになる。なぜなら運動の軌跡から運動を作り出すことができないように、言語は変化そのものとは異なっており、変化に相対的關係を外から押しつけることしかできないからである。このように言語は停止によって運動を構成するとき、両者の間に混合物を生み出し、それを運動と錯覚させ、運動を捉え損なわせる。例えば『試論』では空間と持続の間に混合物として、等質的時間が空間から生じることが示される(cf. DI 74)。等質的時間はこの種の錯覚のうちで最も単純なものであり、『試論』以降、空間から時間を捉えることを原因とする錯覚は、分析から直観への移行、機械論から生命進化を捉える錯覚というように反復して現れながら、次第に大規模になっていくように思われる。また真なる言明の「遡及運動」(PM 14)が歴史に及ぼす錯覚など、その現れ方も非常に多様である。しかしそれらの原因は一貫して言語の空間的性質に求められ、しかも時間的性質を構成する場合のみ、それに関して錯覚が発生するのである。

言語が社会に起源をもつということが、認識論における障害になるのも、同様にそれが哲学に錯覚を引き起こすからである。言語は社会的起源をもつために事象を利害に基づいて分節する。それゆえ言語は利害による分析を、事物に則した分節であるかのように錯覚させる。その結果、言語は事物と相対的な関係しか結べず、事物の内的な分節を取り逃すことになる。以上が言語の起源が社会的であることが錯覚の原因となる理由である。さらに社会的な錯覚は生物が利害に基づいて選別を行うことにまで遡り、言語だけでなく直接的な知覚に対してもさらに深くこの錯覚は根づいているのである。

さて空間的性質に関する錯覚が運動を固定するという利益に基づくという点では、二つの錯覚は同じ根をもつと言えるかもしれない。しかし時間を空間によって再構成する錯覚は社会の利害を超えて進み、要するに前者の錯覚は知性に、後者の錯覚は本能に基づくものと言えるだろう。しかし知性が本能を超えとしても、これらの錯覚は解消されるどころか、社会的起源による錯覚は知性による錯覚によってさらに拡大されることになる。

例えば『講義』でその起源が動物へと遡られる自然的記号の中にも、利害に基づく事象の分節による錯覚の根は存在すると言えるだろう。この段階では選択という運動・行動と情動は結びついており、その意味ではこれは内的な生きられた分節である。自然的記号から人為的記号の移行の際、『講義』では運動と情動を切り離すものが何であるか不明なまま

だったが、ここに至ってそれは次のように推定されるのではないか。すなわちベルクソン哲学では内的な変化を分断し、その外的な写しを取るのは知性である。そして知性こそが記号と事物の間にあった関係を切断し、外的な写しを思い浮かべて操作することを可能にし、社会生活の要求に応える。「産業にとって重要なのは思考が現実が遅れることができ、必要な時に、現にあるものに没頭せずに、あったものやありうるものにかかわることができることである」(PM 107)。しかし同時にやはり記号と事象の間には習慣的な連結しかなくなり、言語の文節はさらに恣意的になって認識における錯覚は深まることになる。

ここで知性は社会的本能を超えて科学へ向かうとしても、問題なのは哲学である⁽⁷⁾。この自然から人為への記号の移行は、ベルクソンが一般観念について述べる三段階、すなわち物質的同一性から生物的類似性を経て言語の一般性へ至る過程に対応する。そしてこの最後の段階である言語の一般性が、無を始めとする偽りの諸問題を花開かせ、上述の二つの錯覚が最終的に弁証法へと結実するのはまさに哲学においてなのであり⁽⁸⁾、ベルクソンの批判もまたそこにたどり着くように思われる。「注意を眠り込ませ、夢の中で前進する錯覚を与える弁証法的技巧に永遠の別れを告げよう」(PM 72)。ここで前章の自然から文化への移行のテーマがいかんにして言語批判と深く結びついているかが理解されるだろう⁽⁹⁾。

哲学的認識をむしろ言語の作用がいかん複雑で、多岐にわたろうとも、以上の二つの原因によって規定されており、錯覚はそこからしか派生しない。例えば無の観念が「廃絶(suppression)」と「代置(substitution)」(PM 106)で説明されるとき、廃絶は知性の変化の不動化もしくは情動と運動の切断によって可能になり、それと同時に代置は社会的要請の延長である、と言えるだろう。このような規定は認識論における言語批判に一貫性を与えるものである。以上、ベルクソン哲学の認識論における言語の消極的・否定的評価をする錯覚の二つの原因について考察した。

次に存在論において言語が非難されるのは、認識論において二つの原因が哲学に錯覚を引き起こしたときと異なり、存在論的に不動に深く関わる限りにおいてである。實在の全てが運動・変化であるとするベルクソン哲学においては、停止は自由と進化の障害や怠惰であり、存在論は実践的価値に直結するのである。認識論の二つの原因のうち言語の静的性質はここで言語批判に直結する。「真の不動は、運動の欠如と理解するならば、存在しない」(PM 159)。不動は二つの列車が等速度で進むとき互いに感じるような虚構的なものであり、ベルクソン哲学における言語の虚構性はこの不動性に由来すると考えられる。そしてこの不動性により言語は抵抗・障害として現れることが示される。「内的経験はどこにも適合する言語を見出さないだろう」(PM 45)。ここでは認識論における錯覚の二つの原因のもう一方である言語の社会的起源は、停止をもたらす限りで付随的に否定の原因となる。

例えば言語の原初的機能は「協力のために伝達(communication)を確立すること」(PM 86)と述べられたあとで、「会話(conversation)は保守(conservation)に酷似する」(PM 89)と会話をもたらす停滞や安逸さが批判されている。

しかしこのような存在論における即自的な言語の非難は、認識論の錯覚による非難と区別されるべきである。後に見るようにこれらはそれぞれ言語の肯定面と異なった関係をもつことになるからである。それでは以下で言語の肯定面を見ていくことにしよう。

第三章 言語肯定の多面性

1 哲学における言語(狭義)と思考の協働

これまでも引用してきた「序論第二部」の結論部で、ベルクソンは認識論における言語批判が集約される弁証法に対してこう述べている。「このようなやり方で哲学することに対して、我々の哲学活動の全ては一つの抗議であった」(PM 98)。こうして認識論における言語のネガティブな側面ののりこえは哲学の問題となるのだが、その際、注意しなくてはならないのは、この問題が一見そう見えるとしても認識論における言語の排除ではなく、言語がその原因となっている錯覚の回避として提起されているということである。

錯覚は前章で確認したように、二つの原因から様々に現れていたのだが、まず問題となるのは、言語の社会的起源・機能の引き起こす錯覚である。というのも一般観念の所で述べたように、この錯覚は知性によって解消されるところか拡大されるのであり、それは知性が言語のもつ実利的な方向を延長させるからである。従って、錯覚回避の最初になすべきことは「哲学することは思考の働きの習慣的方向を逆転することにある」(PM 214)ということになるが、これは「動的な実在の中に身を置き、絶えず変化するその方向性を取り入れ、直観的にそれを把握する」(PM 213)ということを目指すものである。

こうして直観への方向が示されるが、では次に言語による実利的分節から事物に則した分節への移行は、実際にどのようにしてなされるのだろうか。まずこの移行の手段あるいは出発点として概念はふさわしくないとされる。「象徴は自らが象徴する対象に代置され(se substituer)、いかなる努力も要求しない」(PM 186)からであり、前章で指摘したように、記号と対象の切断こそ、実利的分節をさらに恣意的にするものであったからである。代わりに概念よりも直観に近いものとして、「媒介的イマージュ(image médiatrice)」(PM 119)が出発点として挙げられる。ベルクソン哲学において、イマージュは対象と切断あるいは区別されない知覚であり、その意味で概念よりは具体的で事物に則しており、またイマージュはそれ自身動的で、概念の固定的性質や、言語の静的性質をある程度脱するものである。しかし実利的分節は知覚にも内在するのであり、イマージュはそれがそのまま直観になる

ことは否定される。複数の媒介的イマージュが、直観の単純で多様な性質を表そうとするが、そのいずれもが直観に置き換わることはないのである⁽¹⁰⁾。この後で直観に至るには結局、内的持続によるほかないことが示され、この後も繰り返し分析から直観に移れないことが強調される。一体この持続と知覚、直観と分析の断絶は何を意味するのだろうか。

その鍵を説くものこそ微積分であるように思われる。「形而上学入門」では先に引用した思考の習慣的方向の逆転が述べられた後、次の節で具体的实在の方向に進むために「形而上学の目的の一つは質的な微積分を行うこと」(PM 215)が述べられる。また『物質と記憶』の第四章でも「経験が実利の方に屈折して固有な意味の人間的经验になる決定的な曲がり角を越えて」(MM 205)行くために、微積分が従うべき方法として挙げられている。ここで最も注意しなければならないのは、この持続と知覚の断絶が段階的移行ではなく飛躍を意味すること、そしてこの飛躍は持続とイマージュ間の深淵を示すが、決してイマージュの破棄を意味するのではないということである。全てが成功することはないにせよイマージュを廃棄せずに精神が知覚から持続へ飛躍をすればどうなるだろうか。恐らくイマージュは、純粋な傾向や方向として現れることになるだろう⁽¹¹⁾。このとき飛躍の後も内的な持続の側から、イマージュは純粋に動的性質あるいは時間的性質として把握され、肯定されるのである。このようなイマージュはもはや元のままではなく、動的な傾向を示しながら、互いに関係づけあうだろう。これこそ事物に則した分節を示すものであり、この実利的分節からの移行によって、言語の社会的起源による錯覚は回避されるように思われる。またここに至って初めて、言語の静的性質による錯覚の解決の糸口をつかめるであろう。というのもここでは全てが発生状態における方向の変化として把握され、もはや停止によって運動を再構成するのではなく、運動から停止に向かうことが重要になるからである。

残る問題はこの動的性質が、言語の静的性質とどう関係するかである。まず言語の精神面のところで引用したように、言語の精神面をなす思考は不可分な動きであり、その停止が観念である。また持続の側から把握された諸イマージュの傾向の動的な諸関係は、第一章で示した動的図式の性格に当てはまると推測される。この図式内で各イマージュは対立や協力関係に入り、問題解決のための全的な捉えなおしによって一つの意味を想定し、意味は図式を展開して対象へ向ける力として働く。「図式からイマージュの行程の上に思惟作用(intellection)の努力の感情は生じ」(ES 174)るのだが、この行程こそ言語の動的性質と静的性質の結びつきであり、これは程度の差はあるにせよ新しい分節化を示している。言語の空間的性質によって時間的性質を再構成するときのみ錯覚は生じる。ここにおいて言語の空間的性格と時間的性格の協働によって錯覚は回避され、時間的性質から空間的性質が生み出される創造的な努力において両者はともに肯定されるのである⁽¹²⁾。

認識論における言語の肯定面については次のようにまとめられるだろう。直観へと向かう過程においては、言語は傾向性として肯定され、これは微積分の手法に対応する。この質的な断絶においては一見、言語に対する否定が強調されるように見えるが、実はそれは錯覚を回避するためのものにすぎない。直観から下降する過程においては、言語は創造の中で全的に肯定される。この場合狭義の言語にとって重要なことは、どのような思考と協働するか、すなわちこの思考が力、意志、情動などいかなるものから構成され、いかなる起源から来たかということになるだろう。そして以上によって構築されるものこそ形而上学にはかならず、ベルクソンは『二源泉』において最終的に形而上学における言語の役割を肯定するように思われる⁽¹³⁾。「形而上学は取るか捨てるかの完全な体系である代わりに、獲得された結果の漸進的な蓄積によって、科学と同じく進歩するだろう」(MR 263)。

2 自然と文化における言語の機能

狭義の言語は思考との協働によって、認識論的錯覚を回避しても、それは思考の運動から切り離されることで、ふたたび停止の中に落ち込む。そしてベルクソン哲学では存在論において停止はそれ自体で非難の対象となり、それは言語（狭義）にとって不可避であるように見える。この言語の物質的性質による存在論的な消極的 - 否定的評価は、『創造的進化』では実践的価値に直結し、言語は持続や生命にとって回避すべき障害として現れる。

「最も生き生きとした思考も自らを表現する決まり文句の中で凍りつくだろう」(EC 128)。

しかし物質を回避する一方で、生命はより本質的には「なまの物質に働きかける傾向」(EC 97)であり、「必然に組み込まれて必然を自らの利益に転ずる自由」(ES 13)である。このように生命による物質への働きが生物の進化を可能にする。しかしこのとき言語も精神面による物質面への働きかけからなることを思い起こせば、両者の類比は明らかである。事実、言語は意識や知性を解放するものとして機能するのである。「言語は知性を解放するのに多大な貢献をした。事実、あるものから他のものへ行くようにできているので語は本質的に移動可能で自由である」(EC 160)。認識論では錯誤の原因であった言語の「代置」が、ここでは肯定されていることに注意せねばならない。ここで問題になっているのは言語の本質ではなく、その機能と結果だからである。言語の存在論的な否定的評価は本質的に解消されないにしても、それはベルクソン哲学を構成する多面的な個々の実践的領域において、言語の機能が産み出す肯定面によってのりこえられる。同じく認識論で錯覚をなしていた言語の社会的起源についても「人間はそれ〔意識の解放〕を、言語が思想を集積するように努力を集積、保管する社会生活に負っている」(EC 265)と肯定される。そしてこの言語の実践的な肯定は、認識論における言語の性質と役割が明らかになった後でのみ

可能である。「人類全体は自然を強制することはできないだろうが、自然を反転させることはできる。そして人類はその形態を知っている場合のみ反転させるだろう」(MR 291)。言語の認識論的側面と存在論的側面が識別されねばならない理由はここでも明らかである。

後はベルクソン哲学における言語の肯定の多面性を、個々の領域にそって考察することが残っている。ベルクソンは『試論』以来、ほとんど事実(le fait)について、すなわち文化と自然のうち自然を主題にしてきたが、『二源泉』においては文化もしくは文明を主題として扱う。文化を自然から切り離して考察されることがないのは、『講義』で記号を扱ったときと変わらないが、それは文化と自然が区別されないことを意味するのではなく、両者の間には厳密な識別がなされる。「文明が深く人間を変えたのは、貯水池のように社会的環境の中に習慣と知識が積もることで、社会が新世代ごとにそれらを個人に注ぐからである」(MR 132)。従って習慣は遺伝のような自然本性ではないため、「文明人と原始人の差異は」(MR 83)後天的であり、本性上の差異ではない。これに対して種と種の違いは先天的であり、生物進化と社会の進歩(progrès)は原理的に区別される。しかし文化は土や植物に、自然はそれを除けば現れる岩盤に例えられ、前述したように両者は切り離されることはない。そしてこの関係は言語において次のように述べられる。「言語は慣習の産物である。語彙の中にも構文(syntaxe)の中にさえ自然から来るものは何もない。しかし話すことは自然である」(MR 23)。構造 - 機能という第二の軸が文化 - 自然の次に導入され、ベルクソンは構造に先立って機能から分析を始めるべきだとを述べる(しかし両者は対応関係ではなく、文化と自然の中にそれぞれ構造 - 機能が見出される⁽¹⁴⁾)。「精神が構造から引き出す利益(le parti)は、反対にその構造を決定したはずのものである」(MR 112)。ここで構造とは器官や制度のようなものであり、機能はその働きであるが、前述のように機能とその肯定的な結果(利益)にそくして構造を分析するベルクソンの立場は明白であり、この場合構造から分析することは存在論的否定に逆戻りすることを意味するだろう。この機能の要因となるものとしては『二源泉』における本能、知性、創造的情動の三つが挙げられる。では言語の肯定面をこれらの三要因による機能に従ってそれぞれ見ていこう。

まず言語における知性的機能は科学と考えられる。「科学の全進歩はより広い認識と普遍的機構のより豊かな利用にある。この進歩は我々の知的な努力によってなされる」(MR 179)のであり、科学は技術の進歩とともに文明の進歩を構成する。しかし人間社会の中で知性は科学の進歩という主要な機能のほかに、社会の解体機能等をあわせもつ。そこで社会の防衛のために本能は知性を通じて、言語では神話や魔術などがその構造に対応する創話機能(fonction fabulatrice)として働く。しかし確認したように自然は文化から切り離されないが、峻別されているため、ここで自然的な本能は直接作用することができない。「本能は

直接的に働くことができないが、知性は表象に基づいて働くので、現実の表象に対抗する『想像的な』表象を呼び起こし、知性自身の媒介によって知性の仕事を阻むことに成功するだろう」(MR 124)。このように科学は真の方向、創話機能は偽の方向に向かうが、そのいずれも知性を通した表象として働くので、知的平面(plan intellectuel)上では真偽の表象が入り乱れることになる。注目すべきなのは、制限はあるとはいえ偽の方向に向かう創話機能さえも、機能において肯定されているということである。慣習による人為的記号において科学は量的な漸次的進歩として、創話機能は社会の存続として機能から肯定され、双方から文化もしくは文明の進歩あるいは停滞が構成される。

『二源泉』ではこの文化的進歩に対し、自然的な進化が対置されるように思われるが、それは生命だけでなく、創造的情動からも構成される。この創造的情動を言語的機能の観点から見るとどのようなものになるだろうか。この機能の構造に対応すると思われる芸術作品の例を見てみよう。「作品は素材(matière)であると同時に力であった。作品は芸術家が作品に伝えた躍動を、むしろ芸術家の躍動そのものを刻印(imprimer)した」(MR 75)。言語の精神面は力であり、形であり、運動であったが、それは常に言語の物質面の外からやってきて、協働の後そこから逃れていくものであった。しかし芸術作品は自らのうちに精神面を含み、それ自身新たな躍動を産出しさえるのである。エラン・ヴィタールは有機体にしか伝えられなかったが、ここでエランが言語に伝えられるのは明らかな相違点である。そして成功した芸術作品が人々の好みを変えるものとして現れることを考えれば、この言語的機能は創造的情動の伝達とそれによる変化ということができないのではないだろうか。エラン・ヴィタールの直接的伝達とは異なった、この間接的伝達こそエラン・ダムール(今度は文化から自然へ)にほかならならず、芸術との類似は明らかである。「特権的な道徳的人物は、新しい音楽にも似た新しい感情を創造し、自らの躍動を人々に刻印することでそれを伝えた」(MR 80)。芸術作品もそれ自身は知的平面に属することになる。従って知的平面にはさらに多様な言語が入り混じることになる。そのため言語が機能する状況から抽象して言語の性質だけ分析することは非難され、言語とその環境である非言語的なものとの関係から言語を分析することが常に重要になる。「泳いでいる人の身ぶりも、そこに水があることを忘れていた人にとっては馬鹿げた不条理なものとして見えるだろう」(MR212)。

むすび

以上、概略ではあるがベルクソン哲学における言語のポジティブな評価とネガティブな評価の関係を考察した。両者の関係は一貫しており、時期によって一方が他方に転じたりはしない。確かに『創造的進化』以降では認識論による錯覚が回避された後に、肯定面は

多様化するが、言語による障害が肯定面に移って消滅したのではないことは、言語がもたらす錯覚への注意が相変わらず反復されることから明らかである⁽¹⁵⁾。この言語の二側面が固有の起源をもち判別されることは、持続と空間が決して混同されないのと同様であり、それらの関係は曖昧な両義的なものではない。認識論において言語に対する非難は、本能と知性の二つの原因から発生する多様な錯覚に対してなされ、それに対して肯定面は錯覚の回避を目指し、運動・持続・直観に基づく形而上学を構築する。次に存在論において言語はそれ自身では消極的な価値しか持たない。しかし存在論的に我々が自由に根ざす限り、言語は力を保ちつづけ、実践的領域において多面的に現れる。言語は自由を表現し、自由を増大する機能によって肯定されるのである。言語は非言語的なものとの結びつきによって肯定的な力を持ち、解消されないとしても自らの消極性や不動性をのりこえる。その現れはどんなに多様であろうとも、言語の二側面はベルクソン哲学において一貫してこのような関係をもつということが本論の結論である。

註

- (1) Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, Paris 1945, p. 70.
- (2) 後程メルロー＝ボンティはベルクソン哲学の言語の肯定的な側面を実践的領域において認め、その上で言語の否定と肯定の関係を両義性によって関係づけている。cf. M. Merleau-Ponty, *Eloge de la philosophie*, Gallimard, Paris, 1953, p. 41-42.これに対して本論が試みるのは、ベルクソン哲学において両者の起源は区別されるべきであり、また言語の肯定面は認識論においても認められ、複数の領域で言語が持つ肯定・否定的な側面の様々な関係を示すことである。
- (3) 正しくは『意識に直接与えられたものについての試論』という長い題名であるため、『試論』という簡略形を使う。他に『道徳と宗教の二源泉』を『二源泉』と省略する。
- (4) 第一集の心理学講義の日付について『講義』の編者ユードは1887-1888年と推定しているcf. (C, , 17-18)。『試論』発表は1889年、第二集のアンリ四世校の心理学講義は1892-1893年である。
- (5) 自然的記号と人為的記号は直接的には『創造的進化』第二章の「本能的記号」と「知性的記号」(EC 159)に繋がるものであろう。
- (6) 例としてベルクソンは視覚イメージの瞬間的な暗記や、外国語教育法を挙げている(ES 157-159)。
- (7) 本論は哲学の立場から言語の問題を扱うが、空間の方へ向かう知性は科学言語において肯定的な側面を形成する。ベルクソン哲学の科学言語に対する扱いはポアンカレなどの規約主義に近い。
- (8) ベルクソンは言語の中に蓄えられた現実の切り抜きで哲学体系を構成する手法を弁証法と呼び、プラトン、アリストテレスの名を挙げているが(PM 87)、ドゥルーズはアムランやヘーゲル哲学がベルクソンの念頭にあったとしている。cf. G. Deleuze, *Le Bergsonisme*, PUF(Quadrige), Paris, 1966, p. 38.
- (9) 自然から文化への移行という主題において、『講義』の動物的な情動(『試論』同様、ダーウィンが参照される)という語は、ニュアンスは異なるにせよすでに表象を含んだ精神的な情動(『言語起源論』のルソンの情念(passion)に近い)という『二源泉』第一章で展開されるテーマを胚胎していると思われる。
- (10) 私見では単数のイマージュに対する直観による否定の能力よりも、直観が複数のイマージュの関係や間を通してしか現れないということのほうが重要のように思われる。
- (11) 上手くイマージュが方向として捉えられる時は、「把握されるべき直観が存在する正確な点」(PM 185)を示すことがすでに述べられている点に注意せねばならない。またこの後、我々固有の持続を超えることで、上方と下方ともに様々な持続があることが示される。cf. PM 210、また ES 17.
- (12) ここでせつかく直観によって捉えられた事物に則した分節も、空間化されることで取り逃され、結局

錯覚に戻るのではないだろうか。この疑問を見事に解消するものとしては、ジャンケレヴィッチの力動的図式、思惟作用についての解釈である。思惟作用は誤謬の根源である精神の諸平面の混同をせずに下降できる唯一のものとされている。V. Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF(Quadrige), Paris, 1989, p. 130.

(13) ドゥルーズは『シネマ』の中で、このベルクソン哲学における思考 - 言語の積極的な側面を、イメージとシーニュの体系として示している。この体系を形而上学にとどめずに具体的な映画という領域で論じた意義は大きい。ただしベルクソン哲学と『シネマ』の関係は多くの問題をはらんでおり、ここで扱う余地はない。思考 - 言語については cf. G. Deleuze, *L'image-temps*, minuit, Paris, 1985, p. 131.

(14) ベルクソンの「構造」の概念は顕在的な制度や器官や潜在的な原始的な心性などに使われ、自然 - 文化に広くわたっている。もちろん後の構造主義との関係は慎重に論じられるべきだが、レヴィ＝ストロースは『今日のトーテミズム』で、トーテミズム分析において知性的構造を情動的に発生させるデュルケームと比べて、ベルクソンが知性的機能から知性的構造を発生させていることを評価している。cf. Claude Levi-Strauss, *Le totemisme aujourd'hui*, PUF(Quadrige), Paris, 1962, chap. .

(15) 『二源泉』においてベルクソンが歴史を扱うとき、回顧的な視点に対する批判は撤回されているのか。ベルクソン哲学と歴史の関係を扱うためには、稿を改める必要があるが、ここでは言語の機能の視点から、ベルクソンが歴史を取り上げるのは回顧的視点を肯定するためではないと言うにとどめたい。

引用文献

ベルクソンの著作のページ数は Presses Universitaires de France, Quadrige 版のものである。

DI: H. Bergson, *Essai sur données immédiates de la conscience*, PUF(Quadrige), Paris, 1927

MM: Henri Bergson, *Matière et mémoire*, PUF(Quadrige), Paris, 1939

EC: Henri Bergson, *L'évolution créatrice*, PUF(Quadrige), Paris, 1941

ES: Henri Bergson, *L'énergie spirituelle*, PUF(Quadrige), Paris, 1919

MR: Henri Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion*, PUF(Quadrige), Paris, 1932

PM: Henri Bergson, *La pensée et le mouvant*, PUF(Quadrige), Paris, 1938

C: Henri Bergson, *Cours*, , , PUF, Paris, 1990, 1992

〔哲学博士課程〕